

二〇二四年度

入学試験問題

国語

注意

- ・指示があるまで開いてはいけません。
- ・答えは解答用紙に書きなさい。
- ・本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。
- ・記号がついているものはすべて記号で書き入れなさい。
- ・句読点や「」などの記号も一字とします。
- ・試験中は横を向かないこと。早く終わっても周囲を見まわしたりしないこと。そのような場合には注意されることがあります。
- ・解答用紙上の消しゴムの消しカスは、しっかりとらっておきなさい。

□ 次のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 先祖をクヨウする (2) ヒダイ化した組織 (3) 期限をノばす
(4) ダイチヨウに書く (5) オンコウな性格

□ 次の詩を読み、あとの問いに答えなさい。

べんとうばこ 山崎るり子

- 1 四すみが九〇度のごはんのかたまりとおかずらしきもの
2 型から逆さまにおとされたかたちで
3 ④田んぼの畔の端にあつた
4 この大きさは男子高校生のお弁当だ
5 学校がえりにこっそり捨てたのだな
6 緑の草のなか ななめの陽を浴びて
7 ごはんが白くうかびあがっている
8 残された弁当箱をうけとって
9 母親は心配する
10 何かいやなことがあつて
11 食事がのどをとおらなかつたのだろうか
12 体のぐあいが悪くて食欲がでなかつたのだろうか

- 13 いやいや 仲間とのつきあいで
14 購買でパンを買ったのかもしれない
15 女の子が息子のぶんのお弁当も
16 つくってきたとか？
17 それとも…
18 母親は思いきつていう
19 「何かあつた？
20 ぐあいでも悪いの？」
21 「るっせえなあ いちいちいち」と
22 ⑤彼はいわずにすんだのだ
23 母親はからっぽの弁当箱を
24 いつものように洗い、布巾でふきながら
25 明日のおかずをかんがえている

(山崎るり子『地球の上でめだまやき』小さい書房)

(1) ———— ㉠ 「田んぼの畔の端にあった」とありますが、

① それに気づいたのはいつですか。

ア 未明

イ 昼間

ウ 夕暮

エ 深夜

② ①と考えた根拠を五字以内で書きぬきなさい。

(2) ———— ㉡ 「彼はいわずにすんだのだ」とありますが、なぜですか。

ア 母親は息子の気持ちを考えて何も聞かないように配慮したから。

イ 息子は母親へ乱暴な言葉を投げかけるのをぐっと我慢したから。

ウ 弁当を食わず残したのはいやなことがあったからではないから。

エ からっぽの弁当箱を母親に渡すことでいつも通りを装ったから。

(3) この詩に使われている表現技法について説明したものはどれですか。

ア 母親の言い表せない思いが体言止めを用いて描かれている。

イ 畔の端で弁当をみつけた時の色彩が対比を用いて描かれている。

ウ 男子高校生の素っ気ない様子が比喩を用いて描かれている。

エ 学校帰りに偶然目にした光景が反復法を用いて描かれている。

(4) 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

この詩の男子高校生は思春期を迎えている。きっと、学校のことを家で話さなくなったのだろう。ある日、何らかの理由で弁当に手をつけなかった。そのまま渡せば、母親はその理由を疑問に思い、ためらいをもちつつ、何かあったかを聞くだろう。③ 親からの気遣いを予想すると、家に向かう足取りは重くなる。実際には、④ ほとんど手をつけられることなく捨てられた弁当。互いの思いを重ねながら、親子の日々は続いていく。

① ———— ㉢ 「親からの気遣いを予想」した結果が読み取れる行を数字で答えなさい。

② ———— ㉣ 「ほとんど手をつけられることなく」とありますが、そのことがわかる行を数字で答えなさい。

③ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

資源の枯渇、温暖化、天変地異など、これから人類が直面するであろう困難を科学技術で乗り越えていけるとすれば、人類はもっと珍しく希少価値の高い存在になれるはずです。

しかし、私は何となく物足りなさも感じています。結局のところ達成しているのは、自分を含めた社会の存続で、すべての生物が今までやってきたことと方向性としては変わりません。アリでもハチでも自分たちの社会（コロニー）を存続させるために持てる能力を最大限に使っています。ハチが自身の存続に貢献する飛行能力や攻撃能力（針）を持っているように、私たち人間社会は自身の存続に貢献する科学技術を持っています。

社会の存続のために頑張る姿は生物らしくはありますが、これが「人間らしい」と言えるかというと、少しためらいがあります。もっと自分や自分の属する社会の存続とは関係がなく、他の生物ではありえないような、**④**人間にしかできないような方向性へ向かうことはできないでしょうか。【中略】

人間は増えて遺伝するものの末裔ですが、人間の存在は新しい「増えて遺伝するもの」を生み出しました。リチャード・ドーキンスはそれを「ミーム」と名付けました。「ミーム」とは人間の脳に広がる考え方やアイデアのことを指します。たとえばジョークもミームのひとつです。「面白いジョークを聞いたら覚えて他の人にも伝えたくなるでしょう。こうしてジョークはたくさん人の脳のなかが増えていきます。もっと面白くなるように改良する人もいます。そうすればジョークは変異し、その変異したジョークがさらに広がっていきます。より面白くなったジョークはより速く広がっていくはずで、こうしてジョークも進化することになります。ここで起きているのは、生物進化と同じ現象です。ただ、生物進化と決定的に異なるのは、ミームは人間の脳のなかでしか存在できないところですが、したがって、皆が忘れてしまえばミームは簡単に絶滅してしまいます。

ほとんどのミームは長続きしません。すぐにその寿命を終えて、皆の脳の中から消え去ってしまいます。10年前にどんなジョークが流行ったかなんてだれも覚えていないでしょう。しかし、稀にですが長い間、世代を超えて伝わり、進化し続けるようなミームも存在します。そうしたミームは、「文化」や「芸術」

と呼ばれるようになります。

すべての文化や芸術もジョークと同じようにミームとして人間の脳の中で進化しています。たとえば西洋の美術も、12〜14世紀のゴシック美術、15〜16世紀のルネサンス美術、17世紀のバロック美術といったように、時代を経るにしたがって新しい要素を追加しながら進化してきました。ジョークと異なるのは、その増える能力です。ジョークであれば何年も経てば面白くなくなって、もうみんな忘れてしまいます。次世代に受け渡そうとする人はいなくなるでしょう。しかし、絵画の場合は数百年以上も前から歴史がながっています。その間ずっと絵画の歴史は（一部の人にだけかもしれないが）世代を超えて受け渡され、進化し続けています。前の世代を参考にしつつも、そこにはない新しい要素が付け加えられ続けています。増える能力が極めて高いミームだと言えます。

⑤絵画以外でも音楽や演劇でも同じです。さらに映画でも、小説でも、ドラマでも、漫画でもアニメでもビデオゲームでも、さらには科学でも同じです。単にミームとして進化してきた歴史の長さが違うだけです。どの分野にも歴史があり、時代を超えて引き継がれている増える能力の高いミームです。増える能力が高いということは、すなわち、大きな魅力があり、ファンが多いということの意味します。

⑥こうした芸術や文化の驚くべき点は、生物としての人間の生存に対して全く役に立たないところですが、実際のところ、どんなに素晴らしい芸術作品でも、映画や小説でも、その作品を見る人の生存や子孫を残す可能性には、ほぼ何の影響も与えないでしょう。むしろ、本来、生殖に費やすべきだった時間や労力が取られてしまうので、子孫の数を減らしているかもしれません。しかし、それなのにこうした作品は受け取り手に大きな影響を及ぼし、**⑦**となつていくこともあるように思います。誰しも寝食を忘れて映画、小説、漫画、ゲームなどに夢中になったことがあるでしょう。生きててよかったと思うくらいに心を動かされることもあるのではないのでしょうか。【中略】

ただ、ひとつの可能性として、こうした芸術や文化というミーム自体が私たちの脳に広がりやすいようにうまく進化したということはあるかもしれません。つまり、芸術や文化といった増える能力の高いミームは、人間の脳の中で生きのび

やすく、かつ増えやすいように変化しているという可能性です。言い換えると、ミームは腸内細菌のように人間と共生しているということです。

こう考えると、芸術や文化的な活動が私たちの生きがいにもなっていることも説明ができます。ミームは増えて遺伝するものなので、必ずより生きのびやすく広がりやすいものが進じます。ミームはただの情報なので、脳の構造に影響を与えることは難しいかもしれませんが、もともと人間が持っている脳の構造に一番よく適応した形へと進化することはできるはずで、つまり、人間が寝ても覚めてもそのことしか考えられないくらいに魅力を感じたり、他の人にも魅力を伝えたくなるように進化するはずで、まさに、私たちが夢中になっている文化や芸術（映画、小説、漫画、ゲームなど）に該当するのではないのでしょうか。

そして、こうしたミームたちが、私たちに生きがいをもたらしてくれるのも④妥当なことです。なぜなら、生きがいをもたらすようなミームほど、そのミームの宿主の人間はなんとか長生きして、そのミームをより魅力的にしたり、多くの人にそのミームを広めることに貢献してくれるはずだからです。ミームの側からすれば優秀な宿主となります。したがって、ミームはどんどん人間にとつて、それなしでは生きていけないようなものとなっていくはずで、その意味で私たちが人間はミームと共生しています。人間は脳というミームが存在する場所を提供し、ミームは私たちに生きがいを提供してくれています。相互補完的な関係です。

こうした文化や芸術というミームを維持し発展させていくことは、人間にしかできません。文化や芸術は、人間の持つ複雑な情報処理が可能な脳という器官があることで、初めて生まれて増えることが可能になったものです。まさに人間らしい行為だと言えるでしょう。こうした作品の制作に参加する、あるいは一人のファンとして作り出すサポートをすることによって、私たちは他の生物とは違う生き方ができるかもしれません。

さらに、こうした芸術や文化が魅力的なのは、どうなっているのか予想もつかずワクワクできるところです。生物としての人間の未来は、だいたい予想ができます。ただ長生きになって地球外へ広がっていくだけです。しかし、芸術や文化は、どんな新しいものがでてくるのかは予想もつきません。⑤ミームは私たちの脳のメモリをめぐって競争をしています。その競争に勝った最も増えやすい（つまり魅力的な）ミームが進じます。未来に出現する作品は、今私たちが知っているどの作品よりも魅力的なものとなるはずで、

私たちが人間は、増える有機物質が作り出したひとつの現象です。【中略】同じく増えるものであるミームとともに、予想もつかず、魅力的で、生きていてよかったですと思えるような世界を作りだせるかもしれません。

（市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』ちくまプリマー新書）

(1) ——— ㉠ 「人間にしかできないような方向性」とは、何をすることですか。本文中から二十四字で探し、はじめの六字を書きぬきなさい。

(2) ——— ㉢ 「絵画以外でも音楽や演劇でも同じです」とありますが、どのような点が同じですか。

ア 寿命を終えても、生殖のたびに新しい要素が加わって改良される点。

イ 生物の進化と同じように、人間の脳のなかのみで進化を続ける点。

ウ 時代を超えて引き継がれるほど魅力的で、人々を夢中にさせる点。

エ まったく新しいものが生み出され、ファンを増やす能力が高い点。

(3) ——— ㉣ 「こうした芸術や文化の驚くべき点は、生物としての人間の生存に対して全く役に立たないところですよ」とありますが、なぜですか。

ア 芸術や文化は人類を進化させるだけでなく、直面する困難を乗り越えるためのものだから。

イ 芸術や文化は歴史的な価値はあるものの、個人の生き方に影響を与えるものではないから。

ウ 芸術や文化は人々に感動などを与えるが、人類が子孫を残すことには影響を与えないから。

エ 芸術や文化は人間の心を動かすものだが、人間の寿命をちぢめてしまう性質のものだから。

(4) ㉤ に入る語を本文中から四字で書きぬきなさい。

(5) ——— ㉥ 「妥当」はどのような意味で使われていますか。

ア 適切なこと イ 常識的なこと ウ 変わらないこと エ 価値あること

(6) ——— ㉦ 「ミームは私たちの脳のメモリをめぐって競争をしています」とありますが、それはなぜですか。「から」に続くように、本文中から十六字で探し、はじめの六字を書きぬきなさい。

(7) 本文の内容と合っているものを二つ選びなさい。

ア すべての生物が社会を存続するために能力を身につけているように、人間はミームを使って社会を維持している。

イ 複雑な情報処理が可能な脳という器官があったため、ミームは「増えて遺伝するもの」として生まれることができた。

ウ 小説や漫画、ゲーム、科学も前の世代を参考にして、新しい要素が付け加えられながら継承され、進化してきた。

エ ミームは人間の脳の構造に大きな影響を与え、人間はミームから感動を得るといふ相互に補い合う関係を築いてきた。

オ 未来に出現するミームは予測可能であり、新しい芸術や文化として人々に引き継がれていくことがわかっている。

四 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

コミュニケーション能力、いわゆる「コミュ力」とは、弁が立つことだと考えている人が多いと思います。

言葉で相手を納得させたり、時には言い負かす力がある、そういうイメージです。

でも、それは間違いです。

言葉巧みに相手を誘導する人を見ると、羨ましいと思うかもしれませんが、この「言葉巧み」というのが曲者です。

早口でまくし立てたり、相手の反論を徹底的につぶしたりする人は、議論では勝っても、相手の信頼を得られないことがあります。なぜなら、自分の主張を押しつけているだけだからです。

そもそもコミュニケーションとは、一方通行ではありません。自分と他者が④意見を交換して、理解し合うことです。

Ⅰ、言いくるめられるのは別次元の「納得」がなければ、コミュニケーションが成立したことはありません。

そのために重要なのは、話す力ではなく、実は⑤聞く力なのです。

「聞き上手は、話し上手」と、昔から言われています。それには理由があります。コミュニケーションの第一歩は、相手がどういう人かを知り、何を考えているのか探ることです。

自分の考えと同じ点、違う点がわからなければ、双方が納得できるやりとりは成立しませんからね。

そのために、まず相手の話を聞きます。

相手が話し好きであれば、あなたは聞き手に回りましょう。相手がどういう考えや価値観を持っているのかをじっくり拾い、自分自身の考えや価値観と照らし合わせていきます。

Ⅱ、第一印象とは異なる相手の素顔が見えてきます。それによって、コミュニケーションの方法も決まっていきます。

でも、引っ込み思案で積極的に話さない人もいますよね。その場合は、あなたから話を切り出してみましよう。

そのときに心がけるのは、相手を知るための質問です。自己紹介から始める

のもいいでしょうが、それは相手が話しやすい雰囲気をつくるためです。

⑥いきなり議論や意見交換を始めようとはしないでください。互いについて語り合い、相手を知ることになります。

コミュニケーションを苦手だと感じるのは、この準備を怠っている場合が多いようです。

自分を知ってもらいたい、意見を聞き入れてもらいたい、その気持ちはわかります。でも、⑦はやる心を少しこらえて、まずは相手を知ろう。

コミュニケーションは、そこから始まります。

話を聞くだけでコミュニケーションが上手になるなら、誰だってできそう。そうなんですが、そうでもない。聞き方にコツがあるのです。

たいていの場合、初対面の人の話をすんなり理解するのは難しいものです。生きてきた環境が違い、そもそもどんな人かもわからないわけですから。何げなく聞いていると、半分も理解できないことがあります。

ただ聞き流しているだけでは、面と向かっていても、相手を知るために聞いているとは言えません。

じゃあ、どうすればいい？

話を聞きながら、脳内で自分の言葉に「翻訳する」んです。

Ⅲ、あなたは、スポーツはあまり得意ではなく、友人たちとのバンドでギターを弾いているとしましょうか。

話の相手はバレーボールに夢中で、アタッカーとして頑張っている人だとします。仲間がレシーブしたボールを、アタッカーとして打つ瞬間の緊張と興奮を話してください。相手の口調から、アタッカーの瞬間をいかに素晴らしいと感じているかはわかりますが、漠然としたものです。

そこで、相手の興奮をギターを演奏している自分自身に置き換えてみてください。アタックの瞬間とは、ライブ中にあなたがギターのソロ演奏を務めるとき、に近いのではないのでしょうか。

そう考えると、その興奮が一気に「自分ごと」として感じ取れます。

相手の話を、自分が理解できる言葉や風景に置き換える、これを「自分語にする」と定義しましょう。その瞬間、あなたと相手は急接近します。

これこそが、私の言う「聞く」ことなのです。

そんなの難しそうだな、と思うかもしれない。自分語への翻訳が正しいかどうかともわからないし。

そんなときは、話の切れ目を見計らって、「私はバレーボールのことはよくわからないんだけど、ギターでソロ演奏するハイな気分みたいなものかな？」と尋ねればいいんです。

一瞬、意外そうな顔をされたとしても、あなたがバンド活動をしていると事前に伝えておけば、相手は「そうかも」と共感してくれるかもしれません。

もう一つピンとこないようなら、「それって、どんな感じ？」と尋ねてくるでしょう。今度はあなたが、自分の興奮を素直に話せばいいんです。

このように少しずつ接点を見つけ、共感を探していくやりとりを重ねると、徐々に相手への理解が深まっていきます。

相手を理解するというのは、相手と同じ考えを持つことではありません。また、理解しただけでは、わかり合えたことになりません。

「理解した」とは、ある分野で相手がどういう意見を持っているかがわかっただけです。

その結果、同意できる点とできない点が見つかるはずですよ。

まずは、双方が同じ考えだとわかった点について、相手に伝えましょう。

そのときに共感が生まれます。他人の考えと隔から隔まで同じということは、ありえません。でも、すべての価値観が異なるというのも稀なものです。

コミュニケーションを進めるためには、共感が基盤となります。その共感を深めることで、互いにわかり合える部分ができる。それを支えに、異なる価値観について意見交換をしていくと、相手を敵視したり、「絶対にわかり合えない」と決めつけたりするのを避けることができます。

決めつけたり、相手の言葉や考えを遮断したりする、その瞬間に、コミュニケーションは終わります。

可能な限り、そういう事態を避ける。最終的に理解し合えない点が多いという結論に至ったら、互いの関係をどうしようかと考えればいいのですから。

コミュニケーションを始めた段階で大切なのは、こういう人なんだと認められるだけの情報交換をすること。それで十分です。

話をしていると、徐々に相手のことがわかってきます。また、どのような関係

になるかも見えてきます。【中略】

他人を理解したいとき、共通項を探すことから入ると、親しみが湧くし、相手の理解も早い。

私はたいていそういう姿勢で初対面の人に接しますが、相手の素顔がなかなか見えてこない場合もあります。

一見同じだと思っていたのに実は根幹で違ったと気づいたときの衝撃ときたら、もうお手上げですね。

そんなときは、とにかくその違いをすべて受け入れることです。

「この人とは根本的にはわかり合えない」と納得すれば、そこから先は相手のことが「とてもよくわかる」ようになります。

なぜなら、根本的な価値観が違うから、その人の言動に共感できるわけがないという構えができるからです。

また、そういう発想をする人なら、こんな説明を受け入れてくれるかもしれないというアプローチ法も浮かびます。

相手を説得しようとしても無駄だから、双方は別物という前提で可能なことを考える。

この発想は、「不本意だけど相手の『正しい』に同調する」のとはずいぶん違うでしょう。

コミュニケーションとは、こういうものなんです。相手の話をしっかり聞いて、この人は自分と根本的に異なる哲学を持っていると知ることができたら、

『正しい』を押しつけ合うなんて無益なことはずにすみます。

相手を知るために話を聞き、自分が感じたことを相手にぶつけて、納得のいく関係を築きましょう。

人の話を聞くと、もう一つ大切なものを手に入れることができます。

それは、「自分自身の考え」です。

そんなバカな、と思わないでください。

自分の考えというのは、もともとはあいまいなものです。いろんな経験をした人、人とあれこれ話したりすることで、徐々に形になっていきます。

あるテーマで他人の意見を聞き、それを「自分語」に翻訳しつつ、心の声に耳を澄します。

その通り！

それは違うな！

そういう繰り返しで、漠然としていた自分の考えに目鼻がついてくるのです。

最初は意見が異なっていたのに、話を聞いているうちに同調することだってあります。本当に納得できるのであれば、それもいい。

いずれにしても、コミュニケーションをしっかりと行っていれば、自分の考えが鮮明になります。鮮明になっていないようなら、まだまだコミュニケーション不足だということかもしれません。

でも、相手がどういう人なのかは、できるだけ早く知りたいものです。なので、話を聞いて何かひらめくと、^⑥「そうか、この人はこういう人だな！」と

決めつけがちです。

でも、よくよく相手と話をしても、理解できたのは、まだほんの一部です。

だから、間違っても「キミがどういう人かわかった」などと言わないように。たとえ友人であっても、そんなふうにとめられたら嫌でしょ。

そんな簡単にわかられてたまるか！と言いたくなるでしょ。

だから、物事も人も簡単に決めつけない。それは、あなたの脳内で弾けた「正しい」を疑う理由でもあります。

(真山仁『正しい』を疑え！』岩波ジュニア新書)

(1) ——— ① 「意見」を言いかえた表現を本文中から六字で探し、書きぬきなさい。

(2)

I	・	II	・	III
---	---	----	---	-----

 に適切な接続詞を次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア すると イ たとえば ウ つまり エ さらに オ ところで

(3) ——— ② 「聞く」をより詳しく説明した表現を本文中から二十五字で探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(4) ——— ③ 「いきなり議論や意見交換を始めようとはしないでください」と筆者が忠告する理由は何だと考えられますか。

ア 自分の主張を最初から強く相手へ伝えなければ、互いに共感できる可能性や機会を失ってしまうから。

イ まず自分語に翻訳して、相手を尊重して理解を深めて初めて、議論をうまく誘導できるようになるから。

ウ 相手を知ろうとする態度を示さずに議論を始めると、巧みな相手の誘導に乗って議論に勝てないから。

エ 自分との共通点や違いを明確にし、それを受け入れて初めて、ようやく議論を始められるから。

(5) ——— ④ 「はやる」を言い表す擬態語として、最も適切なものはどれですか。

ア もやもや イ はらはら ウ うずうず エ いらいら

(6) ——— ㊦ 「不本意だけど相手の『正しい』に同調する」を説明するものとして、最も適切なものはどれですか。

ア 相手が自分の意見との相違点を認めるものの、相手の『正しい』意見に飲み込まれてしまう。

イ 必ずしも自分と符合するわけではないが、言葉巧みな誘導により相手の『正しい』を信じる。

ウ 意見を聞かれぬまま、一方的に相手の『正しい』主張を聞き、その論調に気圧され賛同する。

エ 相手と違う意見だったが、相手の『正しい』意見を受け入れ、結果的に自分が折れてしまう。

(7) ——— ㊦ 「『そうか、この人はこういう人だな！』と決めつけがちです」のように、一方的にその相手の人となりや能力に評価をつけることを慣用表現で何と言いますか。

を貼る

(8) この文章の内容として正しいものはどれですか。

ア 自分が相手との議論や意見交換を無益だと感じるのであれば、双方の間には望ましい関係が構築できていないということに等しい。

イ まるっきり自分と考える方向性が違う人と出会ったとしても、話を聞くことによって、新たな関係性を構築することが可能である。

ウ 相手のことを極力知ろうと努め、議論の末に言葉で相手を納得させることができる人が、コミュニケーション能力の高い人である。

エ 互いに意見を何度も交わす中で良好な関係を構築し、同じ意見を持つようになって初めて相手とわかり合えたということが出来る。

五 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「ぼく」こと、大久保慎吾は中学一年の終わりにバスケット部を「ある理由」から退部した。そして二年生になり、クラスメイトの小宮山さんに誘われて、吹奏楽部の見学をすることになる。見学中は部長の日置先輩や同じクラスの高城君のおかげで、気持ちが少し吹奏楽部に傾き始めていた。

五時前に見学を切りあげて、ぼくは音楽室をあとにした。

吹奏楽部は練習中もなごやかなふんいきで、先輩と後輩の距離も近くて、それがなんだかとても魅力的に見えた。二、三年生の演奏を聴きながら、あんなふうに楽器を弾いたらきつたのしいだろうな、とも思った。けれど帰り際、また見学にきてね、と声をかけてくれた日置先輩たちに、ぼくは曖昧な笑顔をかえすことしかできなかった。

校舎の玄関を出たところで、ぼくはなんとなく足を止めた。そしてほとんど散ってしまった校舎前の桜並木をぼんやりながめていたら、「大久保」とだれかになまえを呼ばれた。

声をかけてきたのは、一年生のときの担任の辻井先生だった。しょっちゅうしかめつつらをしていて、ぶっきらぼうなしゃべりかたをする女の先生だけど、しかめつつらでもべつに怒っているわけじゃないことは、一年間のつきあいを知っている。

「ずいぶん帰るのが遅いけど、委員会の仕事でもしてた？」

「いえ、小宮山さんに誘われて、吹奏楽部の見学に行っていて……」

「ああ、部活見学。吹奏楽部は部員不足だって聞いたから、入部してあげたら喜ばれるんじゃない？」

辻井先生はそうすすめてから、ぼくの脚を見おろした。

「ひざの具合は、その後どう？」

「**㊤**激しい運動をしなければ痛まないからだいじょうぶです。ありがとうございます
まず、心配してくれて」

「そうか、それならよかった。だけど、バスケットを続けられなかったのは残念

だったね」

はい、とこたえながら、**㊦**ぼくは辻井先生から視線をそらした。

バスケット部を辞めてから、何人もの相手におなじようなことをいわれた。だけどぼく自身はほんとうに、残念に思っているのだろうか。

そのとき、五時を知らせるチャイムの音が聞こえた。それを耳にした瞬間、ぼくはふいに思いだした。バスケット部の練習は、たいていこのチャイムのあとで休憩時間になる。休憩中には、ここからも見える水飲み場にみんなで作ってく

ることも多い。

「あのつ、これから病院に行かなくちゃいけないので、失礼します！」

ぼくはあたふたとお辞儀をしてその場を立ち去った。急に早足であるきだしたせいも、右ひざにズキッと痛みを感じた。

家に帰ると、ぼくはすぐに制服を着がえて病院に出かけた。ぐずぐずしていたら診察が終わるころには部活も終わって、帰り道でバスケット部の仲間と顔を合わせ

てしまうかもしれない。

バスケット部を辞めてから、ぼくは同級生の部員の人々と会っていなかった。携帯電話を持っていないから、連絡を取りあってもいない。二年生になって、自分のクラスにバスケット部のメンバーがひとりもないことを知ったときは、**㊧**

より**㊨**つとする気持ちのほうが大ぶん強かったと思う。

バスケット部のみんなを避けているのは、部を辞めたこととうしろめたさがあるからだ。ぼくが退部したのは、脚の故障が原因だった。医者にも親にも部活を辞めることをすすめられた。だけど、絶対に辞めたくないと強く抵抗していれば、どうにかしてひざをかばいながら、まだ部活を続けられていたかもしれない。

その道を選ばないで、まわりにすすめられるままに退部を決めてしまったのは、ぼくが心の底でバスケット部を辞めることを望んでいたからじゃないだろうか。

退部をしてからずっと、ぼくはそんなふうに分の心を疑い続けていた。

仲のいい同級生のみんなといっしょの部活はたのしかった。けれどそのみんながどんどん上手になって、大会でも活躍しているのに、ぼくは試合中もほとんどベンチに座ったままだった。

みんなに追いつこうとして、ぼくなりに必死に練習に打ちこんでみたけど、も

ともとの体力のなさや運動神経の悪さをカバーすることはなかなかできなかった。仲間たちの中で、ぼくだけが取り残されていくように感じて、つらくなることも次第に多くなっていた。

だから退部をすすめられたとき、ぼくはあえて抵抗しなかったんじゃないだろうか。脚のことを理由にして、部活の苦しさから逃げたんじゃないだろうか。自分の意志で退部を決めたわけじゃないから、自分があのときほんとはどうしたかったのか、ぼくはいまだにわからないでいる。

【中略】

翌週の放課後、教室で日直の仕事をしていたら、高城くんに話しかけられた。

「大久保、また吹奏楽部の見学にこないか？」

「あつ、きょうは用事があつて……」

ぼくは反射的に嘘をついていた。高城くんは「そうか、じゃあしかたないな」と残念そうに教室を出ていった。

結局ぼくが吹奏楽部の見学に行ったのは一回きりだ。何度も見学に行ったら、入部を断れなくなりそうな気がして不安だった。たのしそうな部だな、とは思ってたから、去年のぼくだったら入部を決めていたかもしれない。けれどいまのぼくにはもう、その勇気がなかった。

書き終えた日誌を職員室に届けて廊下に出ると、そこでぼくはまた辻井先生に会った。あいさつだけしてすれ違おうとすると、「そういえば」と辻井先生がぼくを呼び止めた。

「大久保、吹奏楽部には入部することにしたの？」

「いえ、まだ迷ってるんです。あんまり自信がなくて……」

急に尋ねられたせいか、思わず本音がこぼれてしまった。ぼくのその返事に、辻井先生が首を傾げて聞きかえしてくる。

「未経験者だからってこと？ それなら新入生といっしょに丁寧に教えてくれるだろうから、心配はいらないと思うけど」

「未経験者っていうのもあるんですけど、それよりぼくは、バスケット部も辞めちゃったから」

「バスケット部はべつに辞めたくて辞めたわけじゃないでしょう」

「それは、そうだと思うんですけど……」

ぼくは歯切れの悪い声でこたえてうつむいた。

ほんとうにそうなんだろうか。もともと辞めたいと願っていたから、脚の故障を理由にして退部したんじゃないだろうか。

それがわからないから、ぼくは自分を信じられなくなっていた。吹奏楽部に入部しても、思うようにうまくなれなかったら、ぼくはまた逃げだそうとするかもしれない。いや、きつとそうなる気がする。ぼくはたぶん、そういうやつだから……。

自分に嫌気が差して、ぼくが制服のひざを見おろしていると、辻井先生がふいに尋ねてきた。

「退部してから、バスケット部の仲間には会った？」

「いや、なんとなく会いづらくて……」

「そういわずに、たまには顔を見せてやったら。きょうの六時間目、三年生は臨時の学年集会だったんだけど、それがまだ長引いてるみたいだから、いまなら先輩と顔を合わせずに部の仲間と話せるよ」

そう告げる辻井先生の顔には、滅多に見せないやさしい笑みが浮かんでいた。けれどぼくが驚いていると、すぐにその笑顔を引っこめて、「それじゃあ」と職員室に入って行ってしまふ。

職員室の戸が閉められたあとで、ぼくはバスケット部のみんなが練習をしている体育館のほうを振りかえった。

体育館の床で、バスケットボールが弾む音が聞こえてくる。部活を辞めてまだ半月ちよっとしかたっていないのに、ぼくにはその昔がやけに懐かしく聞こえた。【一】

放課後の体育館を訪れるのは、退部のあいさつをしいたとき以来だった。まだバスケット部のみんなと話をする決心がつかなくて、ぼくはこっそり体育館の中をのぞいてみた。

体育館の中では、バスケット部がすでに練習を始めていた。雅人も、バリーも、もっさんもいる。残りの部員は全員新入生だ。すごい、八人もいるじゃないか。これなら三年生が引退しても、部員不足に悩むことはなさそうだ。

雅人がおもしろいことをいったのか、一年生たちが笑いだした。雅人、愉快ないい先輩をしているみたいだな。ぼくが退部する前は、新入部員の指導なんてめんどうさいとかいってたのに。

先輩らしく振る舞っている仲間の姿をながめているうちに、ぼくはたまたまなく

寂しくなった。【II】

様子を見にきたりなんてしなればよかった。その後悔しながら、ぼくはその場を立ち去ろうとした。ところがそのとき、姿の見えなかったもうひとり二年生部員の満が、ちょうど体育館にやってきた。用事があつて遅れたんだろうか。満はまだ制服姿で、ぼくを見て驚いた表情を浮かべていた。

「やっぱり慎吾か。こんなところでぞいてないで、中に入ればいいのに」

「いつ、いや、練習の邪魔をしちゃ悪いと思つて……」

「そんな氣を遣うことないだろ。おい、慎吾がきてるぞ！」

満が体育館の中に向かって声をかけると、すぐに雅人が飛んできた。もっさんとバリーもそのあとから駆けてくる。

「慎吾、この薄情者！ たまには顔見せろよなあ。寂しいだろ！」

「ご、ごめん。けど、退部したのに練習に顔を出すのは氣が引けて……」

「◎水くさいこというなよ。とにかく中入れて」

④遠慮する暇もなく、ぼくは体育館の中に連れこまれてしまった。

【III】

体育館のステージにみんなと輪になって座ったものの、どんな話をしたらいいかわからず、ぼくはミニゲームをしている一年生たちを見ていった。

「新入部員、たくさん入りそうでよかったね」

「おう、勧誘頑張ったからな。それより慎吾は最近どうなんだよ。おまえのクラス、担任チャラ井だろ。あの人ちゃんと担任とかやれんの？」

「まあ、思ったよりちゃんとやってはいるんだけど、やっぱり辻井先生のほうがよかったなあ」

それからぼくたちは自分のクラスのことや最近のできごとについて話をした。

ぼくがまだバスケット部にあつたころの、練習前や休憩時間とおなじように。

なのにぼくは仲間たちとのあいだに、これまでではなかった距離を感じていた。

それはきつと、ぼくがみんなに隠していることがあるから。そしてみんながぼくに氣を遣つてくれているからだ。その証拠に、ぼくの脚や退部のことには、だれも触れようとはしない。【IV】

しばらく話したところで、ふいに会話が途切れた。一年生がスリーポイント

シュートを決めて歓声をあげた。ぼくがそつちに注目するふりをして、①氣ま

さをまぎらわしていると、満が「慎吾」と話しかけてきた。不安をこらえるよう

な、硬い表情で。

「おまえの脚のことを聞いたときから、謝らないとずっと思つてたんだ。成長痛だろうなんて適当なことをいって、ほんとうに悪かった。あのときすぐに病院に行くようにすすめてれば、部を辞めなくてすんだかもしれないに……」

「えっ、そんな謝ることないよ。ぼくだって、自分の脚が退部しなきゃいけないほどひどい状態になつてゐるなんて思つてもいかなかったんだから」

慌ててそういいかえしても、満の顔は晴れなかった。満だけじゃなくて、ほかのみんなもおなじように沈んだ顔をしていた。

バリーがおずおずとぼくにいった。

「けどよお、慎吾、最近ずっとおれらのことを避けてたろ。だからやっぱそのことで怒つてんじゃないかと思つてよお」

「誤解だよ！ ぼくがみんなと顔を合わせづらかったのは、ただ、バスケット部を辞めたことがうしろめたかったからなんだ」

口にした瞬間に、いつてしまった、と思つた。うろたえているぼくに、バリー

が首を傾げて聞きかえてきた。

「なんでだよ。退部は脚のせいなんだからしょうがないだろ。うしろめたさなんて感じる必要ないじゃん」

ほんとうのことを、正直に話さなくちゃいけない。たとえみんなに軽蔑されたとしても。そうしなければ、きつとこれからもみんなに、ぼくのことと責任を感じさせてしまう。

仲間たちの視線から逃れてうつむくと、ぼくはおそろおそろそのことを明かした。

「たしかに、脚のせいなんだけどさ。親とか医者に退部をすすめられたとき、ぼくははつきり嫌だつていわなかつたんだ。続けようとしていけば、続けられたかもしれないのに。だからもしかするとぼくは、心の底でバスケット部を辞めたがつてたのかもしれないって、そう思つてるんだよ。いくら練習してもみんなみたいにうまくなれないから、それがつらくて部活から逃げたんじゃないか、つて……」

言葉を終えたあとも、ぼくは①みんなの反応が怖くてうつむいたままでいた。

ぼくがびくびくしながら沈黙に耐えていると、満が最初に口を開いた。

「慎吾はそういうことはしないだろう」

それはまるで、ぼくがなにかおかしなことをいつたかのような口調だった。驚

いて顔を上げると、満は明らかに戸惑った表情を浮かべていた。

雅人が「だよな」と相槌を打ってぼくの顔を見た。

「おまえ、本気でそんなこと気に病んでたのかよ。おまえみたいに真面目で練習熱心なやつが、まだ頑張れるのに怪我のせいにしてあきらめたりするわけないだろう」

バリーともっさんもしきりにうなずいていた。その反応を目にしたとたん、胸の底から熱いものがこみあげてきた。

正直、ぼくはみんなのことを疑っていた。あいつは怪我を理由にしてバスケットから逃げた。そう思われているんじゃないかと想像して怖かった。

だけど、そんなことはなかったんだ。ぼくはずっと自分の本心を疑い続けていたのに、みんなはいまでもぼくのことを信頼してくれていたんだ。

ありがとう、とぼくは心からみんなに感謝した。なにいつてんだよ、と雅人が茶化すようにぼくの肩を揺さぶってくる。

「……もっとみんなとバスケットをしてたかったな」

みんなの顔を見ていたら泣いてしまいそうで、ぼくはステージの床を見つめてつぶやいた。

退部から半月以上がたってようやく、ぼくは自分のほんとうの気持ちに気がついた。

(如月かずさ『給食アンサンブル2』光村図書出版)

(1) ——— ①「激しい運動をしなければ痛まないからだいじょうぶです。ありがとうございます、心配してくれて」に使われている表現技法をひらがなで答えなさい。

(2) ——— ②「ぼくは辻井先生から視線をそらした」とありますが、左の文章はその理由を説明したものです。() に入る語句を——— ⑤より前の本文中から十二文字で探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

() () という「うしろめたさ」があったので辻井先生から視線をそらした。

(3) ① ㉠・㉡ ㉢・㉣ ㉤について以下の問いに答えなさい。

- ① ㉠ 戸惑い イ 寂しさ ウ 嬉しさ エ 驚き
㉡ ㉢ ㉣ ㉤ に入るひらがな一字を答えなさい。

(4) ——— ⑥「いまのぼくにはもう、その勇気がなかった」とありますが、そのことが具体的な言動となっている表現は本文中に何度も見られます。その中で最初に描かれている言動をふくむ一文を探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(5) ——— ⑦「辻井先生の顔には、滅多に見せないやさしい笑みが浮かんでいた」とありますが、辻井先生の提案はどのような働きかけになりましたか。

- ア 怪我が治ったらできるだけはやくバスケット部に復帰する決意を改めて固める。
イ 「ぼく」が先輩を避けている気持ちを優先して同級生を事前に集めておく。
ウ バスケット部を辞めた理由が自分でもよく分からない「ぼく」の気持ちを整理する。
エ どちらの道に進むか決めきれない「ぼく」の心の弱さにあきれ決断を催促する。

(6) 次の一文は、「I」も「IV」のうち、どこに入りますか。

もうこの放課後の体育館に、ぼくの居場所はない。

(7) ——㊸「水くさいこと」を左のように言いかえたとき、「○○◇○○◇」に当てはまるひらがな四字を答えなさい。ただし○と◇はそれぞれ同じひらがなが入ります。

○○◇○○◇しつじつ

(8) ——㊸「遠慮する暇もなく、ぼくは体育館の中に連れこまれてしまった」とありますが、この時のバスケット部員たちの思いを答えなさい。

ア なんとしても慎吾にバスケット部へもどってもらいたかった
イ 慎吾の退部の真相をなんとしても直接聞き出したかった
ウ 楽しんでいたこの場をどうにかしてごまかしたかった
エ 急に慎吾がバスケット部にいた昔に戻ったようで嬉しかった

(9) ——㊸①「気まずさをまぎらわせている」とありますが、それはなぜですか。

ア 本当は自分もバスケットをしたがここで無理をするとこれまでの苦勞が水のあわになってしまうから
イ せっかくバスケット部の仲間が輪の中に入れてくれたのに気が付くと話すことがなくなってしまうから
ウ どのタイミングで体育館からぬけ出そうかと昔の仲間の様子を観察していることが見すかされるから
エ 昔の仲間が自分の足を気遣いながらこの機会に謝罪しようとしていることに気づいてしまったから

(10) ——㊸①「みんなの反応」とありますが、それに当てはまらないものはどれですか。

ア 慎吾のうそを受け入れるようによそおうこと イ 慎吾のずるさを厳しく責めたてること
ウ 慎吾のすなおな気持ちを冷たくあしらうこと エ 慎吾の行いに心からがっかりすること

(11) この後、慎吾が吹奏楽部に入部するかどうかを決めるに当たって、本文での出来事から心に誓ったことはどのようなことだと考えられますか。「信頼」「困難」という言葉を必ず使って、四十五字以上五十字以内で答えなさい。